

東円寺跡発掘調査概要・VIII

—東円寺跡92—1区の調査—



1993年3月

熊取町教育委員会

は　し　が　き

熊取町内では、現在のところ38ヶ所の埋蔵文化財の包蔵地（遺跡）が確認されております。この埋蔵文化財は、はるか昔にわたしたち熊取の地に根をおろした人々が長きにわたり築き上げてきた文化を知ることのできる貴重な文化財の一つであります。

今回報告する東円寺跡は熊取町役場の周辺一帯に広がる遺跡であり、町内の遺跡の中では最も広い面積を有しております。遺跡の名称であるところの東円寺という寺院は、平安時代末頃に建立されたもので、町役場の南側に建っていたと伝えられており、現在でも付近の水田に伝えられる小字名に当時の寺院の名残が残されております。東円寺跡はこの寺院と、その周辺にできた中世の集落を含めた遺跡であります。

近年、泉州地域は平成6年の関西国際空港開港に向けて急速に変化しつつあります。本町におきましても様々な土地開発が年々増加しており、その結果、数多くの遺跡が破壊の危機に直面しております。このような社会状況の中で、本町教育委員会ではわたしたちの文化遺産である遺跡の記録・保存を行うために、土地所有者をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て発掘調査等を実施してまいりました。

本書は、平成4年度に本町教育委員会が委託を受けて実施した東円寺跡の発掘調査の成果を概要報告書としてまとめたもので、泉州地域の歴史解明のための資料となり、文化財保護活動の一端を担うことができればと念願し発刊するものであります。

最後になりましたが、発掘調査とその整理作業にあたって多大なるご協力とご理解を頂きました土地所有者ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げますとともに、文化財保護に対するより一層のご協力・ご理解をお願いする次第であります。

平成5年3月

熊取町教育委員会

教育長 七里 弘

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が受託事業として平成4年度に実施した、東円寺跡92-1区の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業に要した費用は、本事業の委託者である桜井 賢一氏の全額負担によるものである。
3. 調査は、熊取町教育委員会町史編さん室 阿部 真を担当者として、平成4年5月6日から6月6日まで現地調査を実施した。
4. 本書における標高はT.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また、方位は地図以外について磁北を示すこととした。
5. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第10版（農林水産省農林技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修 1990年度版）を援用した。
6. 調査の実施にあたり、土地所有者である桜井賢一氏をはじめ、関係者各位から協力・援助を得た。また、本書の執筆に際して、櫻井敏雄（近畿大学）・梅本康弘（泉佐野市教育委員会）両氏から有益な御教示を賜った。記して感謝を表します。
7. 発掘調査及び整理作業にあたっては、阪口雅美・山本恵子の両名の参加を得た。
8. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査に至る経過	3
第1節 既往の調査	3
第2節 調査の契機	4
第3章 調査の成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構	5
第1項 第1遺構面	5
第2項 第2遺構面	6
第3節 出土遺物	14
第4章 まとめ	17

挿図・挿表目次

- 第1図 周辺の遺跡
- 第2図 本調査地及び既往の主な調査地位置図
- 第3図 第1遺構面
- 第4図 第2遺構面及び南・西壁断面図
- 第5図 掘立柱建物1
- 第6図 柱穴1 軒丸瓦出土状況
- 第7図 南西部平面図及び掘立柱建物2柱穴断面図
- 第8図 出土遺物1
- 第9図 出土遺物2
- 第10図 周辺遺構配置図

表1 遺物観察表

図版目次

- 図版第一 遺構
- 図版第二 遺構
- 図版第三 遺構
- 図版第四 遺構
- 図版第五 遺構
- 図版第六 遺構
- 図版第七 出土遺物

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央部に位置し、東を貝塚市、他の三方を泉佐野市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km・南北約7.8kmと南北に長い木の葉形を呈しており、約17平方kmの町面積を有している。

地形についてみると、町南部は泉州地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占め、北部は和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が面積を占めている。面積比では山地・丘陵部が町総面積の約3分の2を占める。

河川は見川川・雨山川・住吉川等が南部の山間部を水源として北部に向かって流下し、さらに泉佐野市域を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。東円寺跡は、大井出川が和田川と合流し住吉川となる付近一帯に形成される低位段丘面の右岸側に位置する。

第2節 歴史的環境

町内の遺跡は現在38ヶ所を数えるが、それらの多くは町北半部に広がる段丘部・洪積地上に立地している。(第1図)

縄文時代については町南部の成合寺遺跡から石器等の石器類が出土しているが遺構・土器類が発見されておらず詳細は不明である。

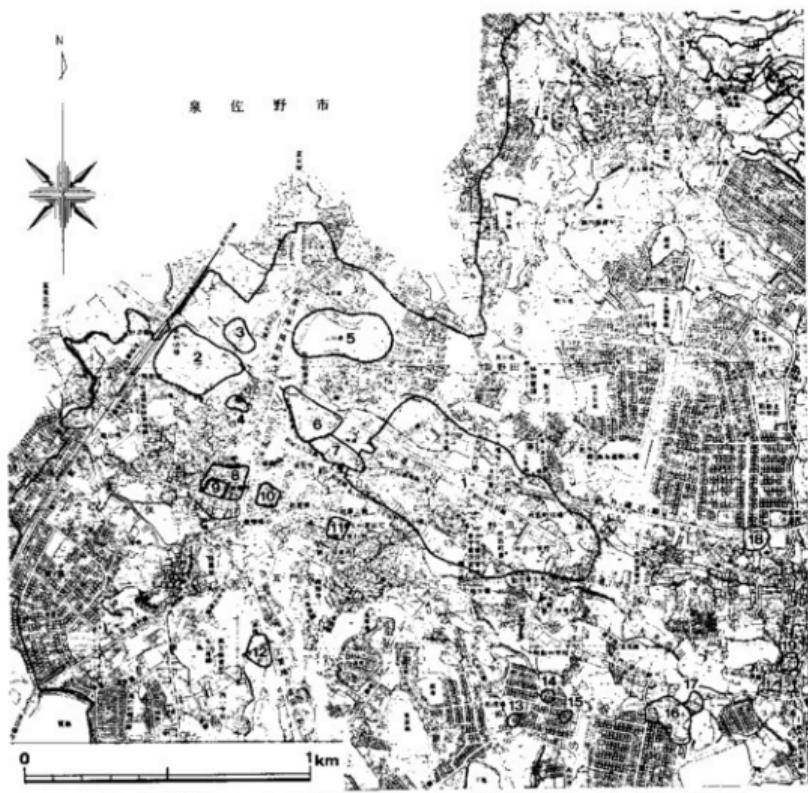
住吉川流域の低位段丘上に位置する大久保B・D・E遺跡(2・3・4)は弥生時代末期から中世に至る複合遺跡である。特に近年の大久保E遺跡の発掘調査で庄内並行期の遺物が流路内から大量に出土しており、近辺に同時期の集落の存在が窺いしれる。又、東円寺跡(1)においてもサヌカイト片が出土しており、今後弥生時代の遺構が検出される可能性もある。

本町における古墳時代の様相は現在のところも不明確である。古墳参考地として五門北・五門古墳(14・15)が挙げられているが詳細は不明である。

奈良時代になると東円寺跡で掘立柱建物群が検出されていることから、東円寺跡の位置する低位段丘面の開発がこの頃から部分的に開始されたことが窺える。

中世になると町域の段丘・丘陵面上の土地利用が本格的に進むようになる。東円寺跡では、平安時代末頃に「東円寺」が建立されるとこれを中心として集落が発展をみるようになることが近年の発掘調査から判明させてきている。大浦中世墓地(16)は15世紀代を中心とする共同墓地跡であり、この時期の五輪塔や石仏等の遺物が出土している。

近世では降井家屋敷跡(8)の調査で旧来の降井家屋敷の区画溝と考えられる溝を検出している。



- | | | | |
|----------|------------|-----------|------------|
| 1. 東円寺跡 | 2. 大久保B遺跡 | 3. 大久保D遺跡 | 4. 大久保E遺跡 |
| 5. 大谷池遺跡 | 6. 紺原遺跡 | 7. 口無池遺跡 | 8. 降井家屋敷跡 |
| 9. 降井家書院 | 10. 大久保C遺跡 | 11. 中家住宅 | 12. 大久保A遺跡 |
| 13. 五門遺跡 | 14. 五門北古墳 | 15. 五門古墳 | 16. 大浦中世墓地 |
| 17. 大浦遺跡 | 18. 小堀内遺跡 | 19. 金剛法寺跡 | |

第1図 周辺の遺跡

第2章 調査に至る経過

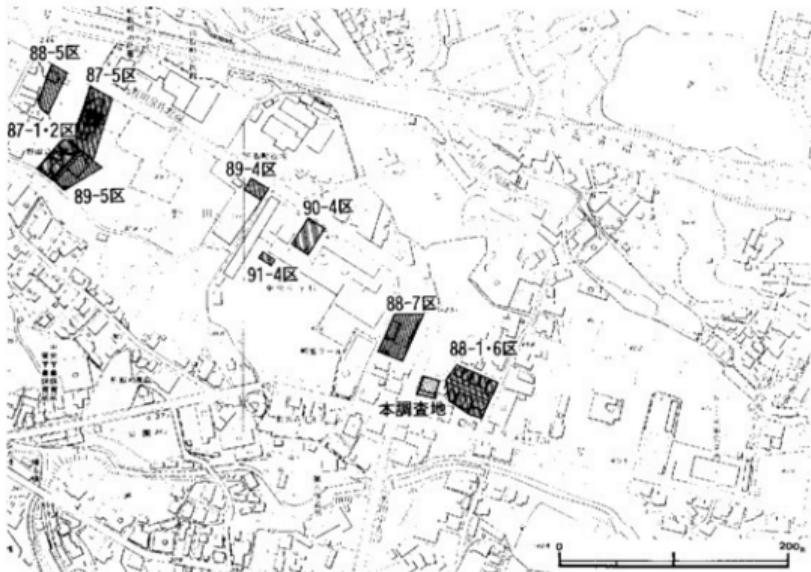
第1節 既往の調査（第2図）

東円寺跡は熊取町の北東部、大字野田に所在し、現熊取町役場及び公民館所在地の付近一帯に広がる、奈良時代から中世にかけての寺院跡及び集落遺跡である（第1図）。地形的には大井出川（住吉川）の右岸域に形成される低位段丘上に位置している。

遺跡名である「東円寺」（または「東曜寺」）は、近辺の発掘調査により出土した軒丸・軒平瓦や文献等から平安時代末頃に建立された寺院であると考えられている。寺院は現在伝えられている「トヨジ」「東永寺」「大門」「堂ノ後」等の小字名から熊取町役場の正面地域に所在していたと考えられているが、関連する遺構は殆ど検出されておらず、伽藍配置等の正確な把握は未だなされていない。

それよりも、近年増加している周辺地域の発掘調査により、東円寺建立以前のこの地の様相や建立以後に寺院周辺に成立した13世紀から14世紀にかけての中世村落の様相が徐々にではあるが明らかになりつつある。

当地週辺において確実な生活関連の遺構が検出されるようになるのは奈良時代に入ってからである。1987年度の87-1区の発掘調査において8世紀代に比定される掘立柱建物群が検出さ



第2図 本調査地及び既往の主な調査地位置図

れたのを最初に、その隣接地（89-5区）の発掘調査においても同時期の掘立柱建物群を検出している。このことは少なくとも奈良時代には同調査地周辺の段丘面が宅地利用されていたことを裏付けるものといえる。

中世（主に13世紀から14世紀代）になると当遺跡中央部だけではなく、東南地域においても掘立柱建物等の集落遺構が検出されるようになる。既往の調査で計10棟以上の掘立柱建物が検出されている。この内、1988年度の88-1・6区の発掘調査では13世紀後半～末頃に比定される掘立柱建物5棟・焼土壙・土器溜り・溝等が検出されている⁹。特にこの調査地周辺の小字が「たらり」「多々利」として現在に伝えられることから、検出された遺構群が鍛冶関連遺構であり、かつ同地点周辺がそれを成業とした者の屋敷跡である可能性が高いと考えられている。

今回の調査はこの88—1・6区の西側近接地にある。

第2節 調査の契機

平成4年3月に上地所有者より熊取町大字野田2174-7・8番地における開発に伴う埋蔵文化財発掘の届出が町教育委員会に提出された。申請地は13世紀後半～末頃の掘立柱建物群等が検出された東円寺跡88-1・6区の西側近接地であることから、同時期の遺構群の検出される可能性が極めて高いことが予測された。このことを土地所有者に説明した上で、試掘調査を実施する了解を頂き、平成4年4月14・15日に調査を実施した。その結果、13世紀後半～末頃に比定される瓦器・土師器等の遺物や土壙・柱穴等の遺構を検出するに至った。

この試掘結果をもとに再度土地所有者と協議した結果、当遺跡に対する理解を頂き、全面発掘調査を実施するための援助・協力を得ることとなった。

発掘調査期間は平成4年5月6日から6月6日までの1ヶ月間とし、約260㎡の面積について調査を実施した。

註

第3章 調査の成果

第1節 基本層序（第4図）

調査地の基本層序は、土質及び堆積状況からみると、以下の5層に大別できる。

整 地 土（1） 旧木造建物の撤去後の整地土（約10~20cm）と、その上層の駐車場として使用されていた際にひかれたパラス（約10~20cm）を含む層である。地表面の標高は約42.6mである。

灰褐色砂質土（2） 水田が近代に宅地に切り替わった際に盛られた層であり、第1遺構面の土壤1等の埋土でもある。

旧耕作土・床土（5） 褐灰色の旧耕作土が部分的に5cm程度残っており、その下に3~5cmの厚さで床土が存在する。

にふい黄褐色系 級（6） 厚さ3~6cmのマンガン斑を多量に含む中世遺構の埋土に似かよった砂質土（6）層である。但し、中世の遺物は殆ど含まず、厳密に言えば包含層とはい難い層である。

褐色系シルト 層（15） 中世の遺構が構築されている層であり、無遺物層である。明褐色砂礫

及び砂礫土 層（15） の上層に本来は明黄褐色シルト層（9）が堆積するが、水平堆積ではないために調査区北西部ではシルトが削平されて存在せず、すぐに砂礫土となる。

第2節 遺 構

第1項 第1遺構面（第3図）

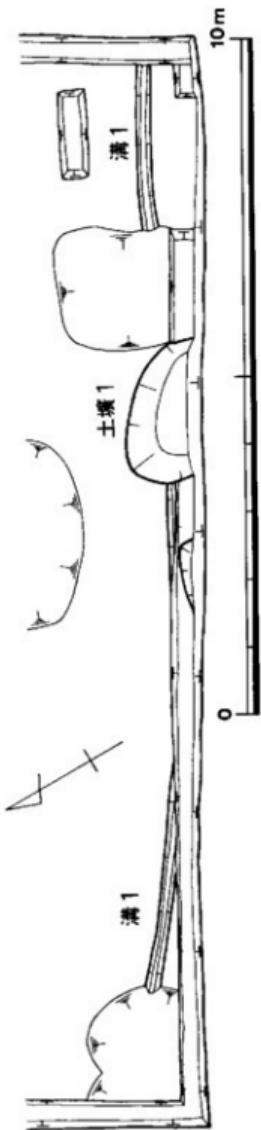
近世以降の遺構面であり、調査区南端部において土壤や旧水田に伴うと考えられる溝が検出されている。

土壤1

調査区南端中央部のやや東寄りで検出された土壤であるが、南半分が調査区外のため全様は不明である。壁面は斜めに直線的に下がり、掘削土を再使用して水平に均した平坦な底部へと至る。深さは検出面より約0.5mを計る。埋土は底部に厚さ5cm前後の灰色弱粘質土が堆積し、その上に灰褐色砂質土が堆積する。底部直上よりカンナの刃と金槌の頭部が出土している。

溝1

調査区東隅からほぼ調査区南壁に沿うように西隅に至る、幅20cm・深さ5cm前後の溝で、調査区中央付近で土壤1に切られる。埋土は旧水田の耕作土であることから旧水田の暗渠的な施設として用いられた可能性が考えられる。



第2項 第2遺構面（第4図）

中世遺構面であり、13世紀後半～末頃と考えられる掘立柱建物や建物を圍む溝・土壤等が検出されている。

溝 1

調査区を南北に2分するように調査区中央部で検出された東から西へ流れる溝である。断面は緩やかなU字状をしており東端で幅40cm・深さ10cmを計るが西方に向かうに従い溝幅は広くなり、西端で幅70cm・深さ14cmとなる。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。遺物は出土していないが、埋土が他の中世遺構埋土と異なる点や、溝1が機能を失ってから溝3が構築されていることから考えて他の中世遺構に先行する時期の遺構であることは間違いないものである。

但し、この溝を境に北側では生活・生産に伴う中世遺構が激減しており、この溝上が中世期においても屋敷地を区画する境界となっていた可能性は高いと考えられる。

掘立柱建物 1（第5図）

調査区の南側東寄りで検出された建て替えのみられる建物であるが、南側は調査区外となる。立て替えは同規模・同方位で北方向へ40～60cmずらして行われている。規模は桁行3間以上、梁間3間（約6.5m）であるが、近接する88-1区調査の際に検出された同方位を持つ桁行5間×梁間3間の掘立柱建物からすると、建物1についても桁行は5間となる可能性が高い。方位はN-25°-Eを指す。

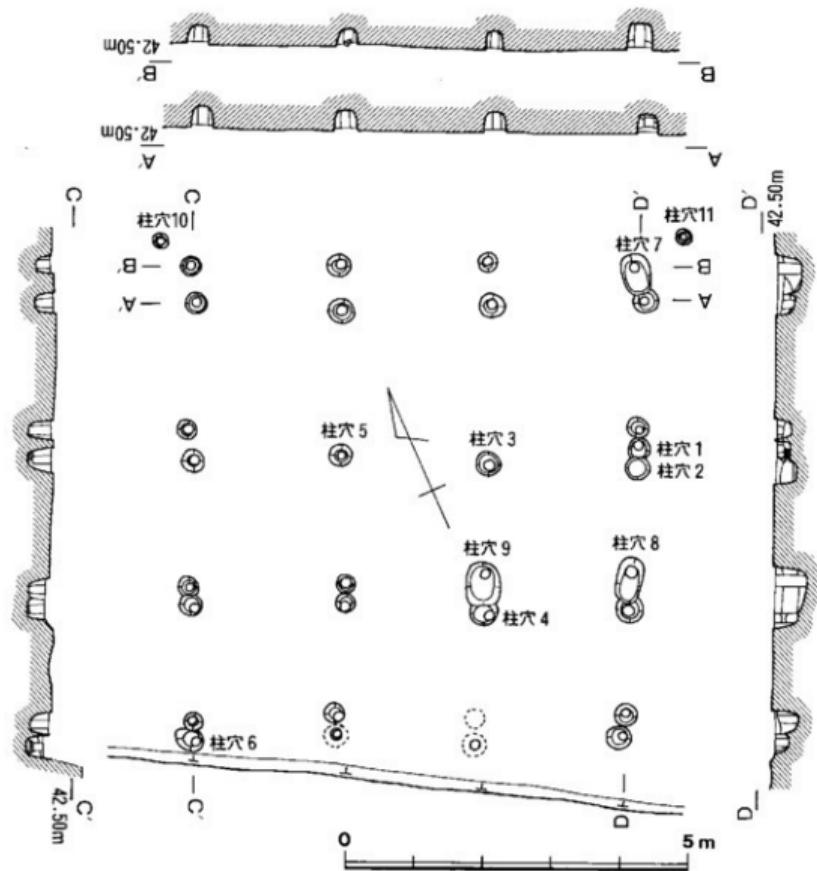
建築初期の建物は、直径30～35cmの正円に近い柱穴掘り形をもち、直径15cm前後の柱痕を残す総柱の建物である。柱穴の深さは検出面より25～40cmを計る。但し、中柱である柱穴3・5については切り合い等の削平を受けていない他の柱穴と比較して浅い掘り方を有する。柱位置については1間をおおよそ7尺（2.2～2.3m）にしているが、柱穴1と2の関係のように、最初に柱穴2を掘ったまではいいが柱位置が合わず、改めて正位置に柱穴1を掘り直すという工程がみうけられるものも存在した。又、中には柱穴1・4・6のように、使われなくなった「東円寺」の軒丸瓦を柱の根石代わりとして転用している例がみうけられた。



1. 黄褐色土
2. 7.5YR6/2 黄褐色砂砾土；洪积土第1层土。
3. 36/ 黑褐色砂砾土；洪积土第1层土。
4. 10YR6/6 黄褐色砂砾土；洪积土第1层土。
5. 10YR6/1 黄褐色砂砾土 + 7.5YR4/6 砂质粘土
6. 10YR4/3 黄褐色砂砾土；冲积带多量风化带。
7. 10YR4/3 黄褐色砂砾土；冲积带多量风化带。
8. 10YR6/3 10.5M; 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。
9. 10YR6/6 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。
10. 10YR4/1 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。
11. 10YR4/4 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。
12. 10YR5/2 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。
13. 10YR5/8 黄褐色砂砾土；冲积带2层土。
14. 10YR5/4 10.5M; 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。
15. 10YR6/3 黄褐色砂砾土；冲积带1层土。



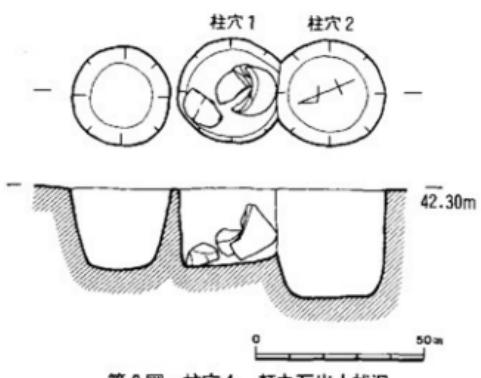
第4図 第2造構面及び南・西壁断面



第5図 捜立柱建物1

柱穴1での瓦転用の方法は、まず、根石として使用する際に邪魔になる軒丸瓦の丸瓦部を大部分打ち欠き、その後に瓦当部を下に向けて瓦当裏面の上に柱が乗るようにして利用されていた（第6図）。柱穴底部の北隅で検出された河原石は本来瓦の北側下に噛まっていたもので、上屋根の重みにより石が北側にずれたため瓦自身がその重みに耐え切れなくなり、北方向に割れ沈んでしまったことが推測された。

柱穴4においてもまず底に石を据えた上で、その上に邪魔になる丸瓦部を外した軒丸瓦を瓦当部が下向くように据え置いていた。特にこの柱穴は深さが50cmと他の柱穴より深く掘られた



第6図 柱穴1 軒丸瓦出土状況

次に建て替え後の建物であるが、柱位置を全体に北寄りに40~60cmずらすように構築されており、規模・方位とも以前の建物とほぼ同一となっている。柱穴の掘り形・規模についてもほぼ同一であるが、柱穴7・8・9については、柱の予定位置がずれたためにさらに北側に柱穴を掘り広げた結果、掘り形が南北に延びる長円形を呈するものとなったと考えられる。特にこの3つの柱穴は掘り方が大きくなりすぎた結果、柱が傾くのを防ぐために掘削土で念入りに裏込め部を突き固めているのがみうけられた。又、建て替え以前の柱穴3・5に対応する柱穴が検出されなかったが、柱穴3・5の掘り方が他の柱穴と比べて浅いことから、これらに対応する柱穴は後世の削平を受けて存在しなくなったものと考えられる。

初期の建物との構造上の違いが見受けられる点として、建物の北東・北西隅に直径20cmの柱穴（柱穴10・11）が検出されている点が挙げられる。この2つの柱穴は、建て替え後の建物の隅柱から主軸に対して約45°の角度の位置に掘られていることや、他の柱穴よりも一回り小さいことから考えて、建て替え後の建物に補われた支え柱の跡である可能性が高いといえる。

柱穴埋土については地山ブロックの混じる黄褐色系砂質土であり、柱痕埋土は暗褐色系砂質土である。

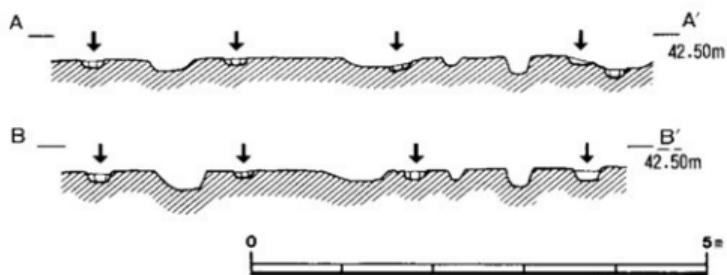
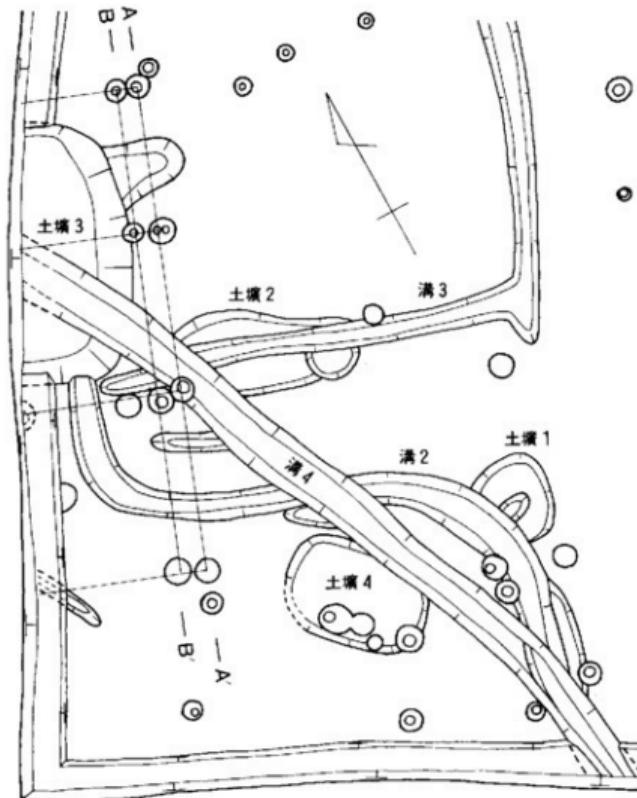
建物の存続時期であるが、初期の建物1については柱の根石に転用されていた軒丸瓦が、廃棄された東円寺の瓦であることと、出土遺物が13世紀後半のものと考えられることから、最初の建築時期を13世紀中頃以降とすることが可能であろう。次に建て替え後の建物1の廃絶時期の下限については、今回の調査で14世紀代に下がる中世の遺物が出土していないこと等から13世紀末頃に置くことが可能である。これらのことから、掘立柱建物1の存続時期は13世紀半ばから末頃までの約半世紀の間であり、その間に1度建て替えを行ったものと考えられよう。

掘立柱建物2（第7図）

掘立柱建物1の西側、調査区の南半部西隅で検出された掘立柱建物であるが、建物の大半は

ため、石と瓦とで柱底の高さを調整していた。これに使用されていた石は本来擧り石であったものを適当な大きさに打ち欠いたものであり、表面には焼成を受けた形跡がみうけられた。

又、柱穴6において根石代わりに使用されていた瓦は、柱穴4で使用された軒丸瓦の内の不必要部分として外されていた丸瓦部であり、これの凸面側を上向きにして据え置かれていた。



第7図 南西部平面図及び掘立柱建物2柱穴断面図

調査区外となる。規模は1間約6尺(1.8m前後)の南北3間であり、柱穴は直径20cm前後の円形の掘り形を呈し、直径10cm以内の柱痕を有する。柱穴の深さは検出面より10~15cmを計る。方位は建物1と同一方向を有する。又、柱穴が東西方向に2個づつ並列していることから、建物1と同様一度建て替えを行っていることが窺える。建物1より規模が一回り小さいことから、建物2は主屋(建物1)の西側に建てられた作業小屋的な建築物であった可能性が考えられる。柱穴埋土は黄褐色(10YR5/8)砂質土、柱痕埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土である。

溝2・3(第4・7図)

溝2は調査区南壁中央付近から建物1の主軸に並行して流れた後、90度西方向に曲がり、調査区西端で今度は90度北方向に曲った後に土壤2の南辺東隅にとりつく溝である。断面は壁面がほぼ垂直に立ち上がるU字形を呈する。溝幅は30~50cm、深さは検出面より約15cmを計る。溝底の比高はほぼ水平に近いが土壤2に向かって数cmの微量な傾斜がついていることから、水は南方向から土壤3に向かって流れ込んだものと考えられる。埋土は2層に分かれ、上層に褐色(10YR4/4)砂質土、下層ににぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土が堆積する。

溝3は、溝2が土壤3にとりつく地点から始まり、東方向へ向かって流れた後に建物1の1.5m手前ではほぼ直角に北方向に曲り、建物1の主軸に並行しながら調査区北側に向かって流れる溝である。深さは5~10cmと溝2に比べて浅く、底面は北方向に向かって緩やかな傾斜を持つ。溝幅は30~40cmを計り、断面は緩やかな弧を描く。埋土は溝2下層堆積土と同じである。

建物1の主軸方向と溝の南北方向の軸が一致し、かつ両溝からの出土遺物に時期的な差異が見られないことから、溝2・3ともに建物1と同時期に構築され、溝2が引水及び建物1の雨落ち水の排水機能を、溝3が排水としての機能を有した可能性が考えられる。

溝2からは土師器小皿(第9図4)・瓦器碗(13~15・24~26)・土師器羽釜(30)等が出土し、溝3からは土師器小皿(5)・瓦器小皿(6~9)・瓦器碗(16)等が出土している。

溝4

調査区南西隅を斜めに横切るように検出された南から北に流れる溝である。幅約50cm、深さ15cmを計り、断面は緩やかな掘り鉢状を呈している。溝2・3及び土壤2を切って構築されている。埋土は暗褐色(10YR3/3)砂質土で、瓦器・土師器片が出土していることから溝2・3及び掘立柱建物1・2、土壤2等の廃絶直後あまり時を置かずして構築された溝と考えられる。

土壤1

掘立柱建物1の西方2m付近で検出された土壤であるが、性格等は不明である。長辺1m、深さ10cmを計る。埋土は褐色(10YR4/4)砂質土であり、底部直上より瓦器碗(第9図17)が出土している。埋土からは瓦器小皿(10)・瓦器片の他、8世紀代と思われる須恵器の壺の底部片(3)が出土している。

土壤2

建物1の西側で検出された凹み状の遺構であり、溝3によって中央部から2分される。長円

形を呈しており、長辺約2.2m・短辺1m、深さは10cmを計る。埋土は褐色(10YR4/4)砂質土であり、瓦器榠(第9図18~20)の他、瓦器片・土師器の羽釜が出土している。

土壤3

調査区西隅の中央部やや南寄りで検出され、掘立柱建物2の内に納まる位置にある土壤である。西半分は調査区外となるが全体にやや丸みを持つ隅丸長方形の土壤となると考えられる。東辺の長さは2.8m、深さは検出面より30cmを計る。急傾斜を持つ壁面は鋭角ぎみに広い平坦面を持つ底部へとつながる。南辺の東隅で溝2が取り付くが、溝底部と土壤底部との比高差は15cmあり、土壤内に水を貯めることができること、又、土壤底部の砂礫層が鉄分の沈着によりやや褐色化していたこと、土壤が掘立柱建物2内に納まる可能性のあること等からみて、溝2から水を引いた上で土壤内で水を必要とする何かしらの作業を行い、不必要となった水を溝3から排水した可能性が考えられる。埋土は褐色(10YR4/4)砂質土で、瓦器榠(第9図21)の他、瓦器・土師器・須恵器片等が出土している。

土壤4

溝2の湾曲部南側で検出された土壤である。北東部を溝4により切られる。N-40°-Wの方位に長軸を持つ長辺1.6m・短辺1.1mの隅丸長方形の土壤で、深さ10cmを計る。埋土は褐色(10YR4/4)砂質土で、瓦器小皿(第9図11)・瓦器榠(22・27)の他、瓦器片・土師器片(29)・須恵器片等が出土している。

土壤5

調査区南壁中央部で検出された土壤であるが、近代による破壊や他の遺構の切り合いを受けているため全様は不明である。現状で南北幅2.2m、深さ12~14cmを計り、平坦な底面を持つ。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土であり、瓦器榠(第9図28)の他、瓦器・土師器片等が出土している。本遺構完掘後、建物1に伴う柱穴を検出し、柱痕埋土も本遺構と同じであることから建物1に付随する土壤である可能性も考えられる。

土壤6

調査区南東隅で検出された土壤である。南西辺を底辺とする二等辺三角形状を呈しており、長辺1.5m・南北辺0.8mを計る。深さ約5cmの平坦な底は北東部分で摺り鉢状に落ち込む。落ち込み部の深さは15cmを計る。埋土は溝4と同じ暗褐色(10YR3/3)砂質土であり、建物1廃絶直後の時期の遺構と考えられる。瓦器・土師器片が出土している。

土壤7

土壤4を切って構築されている土壤である。北端は霍乱のため不明であるが、長辺約1m、短辺0.7mの南北に長軸を持つ長円形の土壤となると考えられる。深さは現状で15cmを計る。埋土は土壤6と同じであり、建物1廃絶直後の頃の遺構と考えられる。瓦器片が出土している。

第3節 出土遺物（第8・9図、表1）

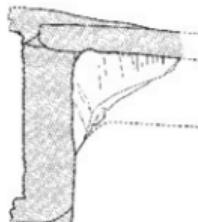
遺物は13世紀後半～末頃の瓦器・土師器を中心として、8世紀代の須恵器片や平安時代末頃の蓮華文軒丸瓦等が出土している。

須恵器（3）

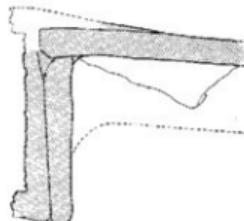
3は8世紀代と思われる短頸壺の底部片である。外面は回転ヘラケズリ調整、内面は回転ナデ調整を行っており、底部径は9.2cmを計る。土壤1の底面から出土している。他に土壤3・4の埋土からも須恵器片が各1点出土している。

軒丸瓦（1・2）

1・2は共に東円寺で使用されていた蓮華文軒丸瓦で、同范のものである。瓦当部の厚さは3.4cm、外径は1が15.7cmを計る。八稜形の凸線と凹線によって2重に区画された直径5cmの中房の内には1+8個の蓮子が配される。中房のまわりには不規則な櫛歯文がめぐる。そしてその外側に子葉を持つ八葉の簡略化された複弁をめぐらす。間弁は形骸化され、各々がつながって蓮弁を覆うようにめぐるだけのものとなっている。その外側には基本的に2条の凹線がめぐるが、この凹線は数ヶ所で途切れながらも羅線状に作られているため、部分的に3重の凹線となる箇所が存在する。内区より約1cm高い外縁部には基本的に3条の凹線が階段状にめぐる。造りについても両方共に雑略化されており、特に1では接合部への粘土の充足不足が明瞭にみうけられた。



1



2

10cm

第8図 出土遺物1

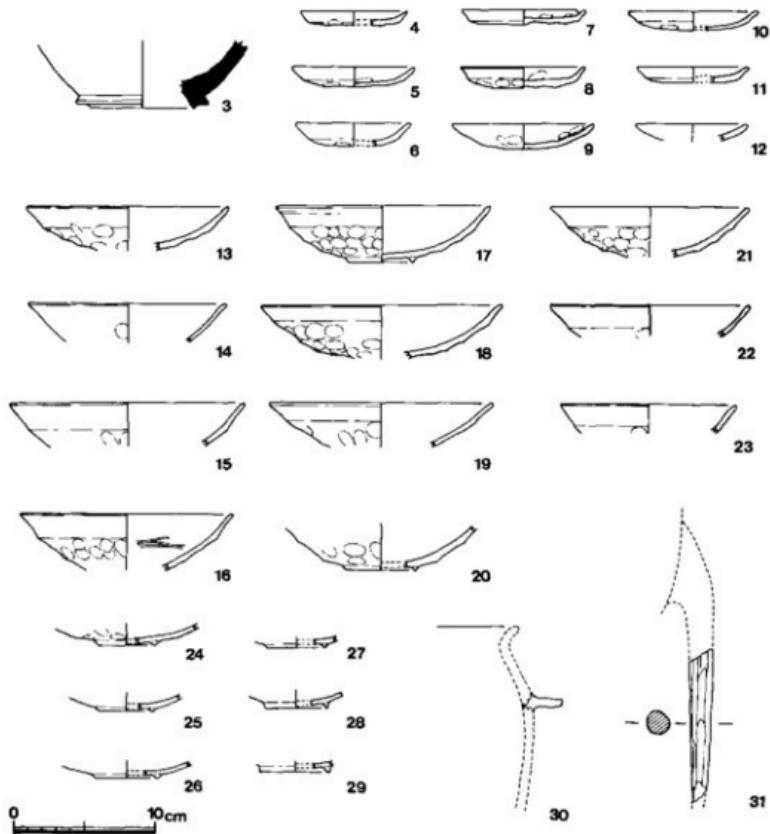
1は最初の掘立柱建物1の柱穴1の根石として転用され、同じく2については瓦当部が柱穴4、丸瓦部が柱穴6の根石としてそれぞれ転用されていたものである。1・2の同范の軒丸瓦は1982年度の東円寺跡の発掘調査の際に1点出土している。

時期については平安時代末頃の所産のものと考えられている。

土師器（4・5・12・29・30）

小皿や羽釜等が出土している。小皿（4・5）は短く摘み上げた口縁部をヨコナデし、底部外面には整形時の指頭痕を残す。

30は土師質の紀州系羽釜の鋸部である。



第9図 出土遺物2

瓦器（6～28、31）

小皿・椀・羽釜等が出土している。

小皿（6～11）は口径9cm前後であり、器高は1～1.7cmの間におさまる。短く外湾ぎみにつまみ上げた口縁部を強くヨコナデする。底部外面には整形時の指頭痕がそのまま残るが、ナデ調整している内面にも指頭痕を残すもの（7～9）が存在する。内外面ともにミガキ調整はみられない。

椀（13～28）は口径14～17cm、器高4cm前後となるものがほとんどである。底部には断面が三角形を呈する直径4～5cmの貼付高台がつく。高台は2～3mmの高さを有する。口縁部に強

いヨコナデを施すために、外面では整形時の指頭痕をそのまま残す体部との間に明瞭な稜がみられるものが多い。外面にはミガキ調整は施されていない。

31は脚付羽釜の脚部であり、掘立柱建物1の柱穴7の柱痕部から出土したものである。

第4章 まとめ

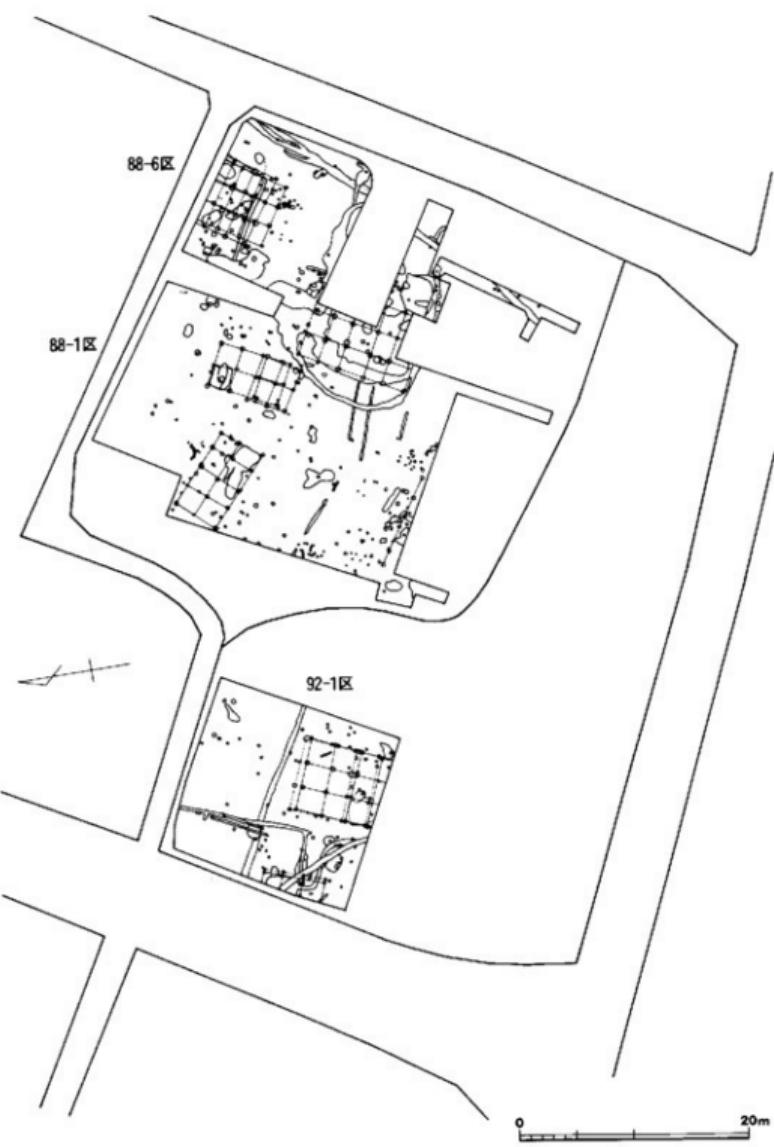
今回の調査の結果、88-1・6区での調査成果と同じく13世紀後半～末頃の掘立柱建物及びそれに付随する各種遺構を遺存の良好な状態で検出することができた。88-1・6区の調査成果を踏まえて今回の調査成果を以下でまとめたい。（第10図）

今回の成果の要点として、①中世の屋敷地を検出し、ほとんど同一規模・同一主軸方向の建て替えを行っている掘立柱建物を2棟検出したこと、②両掘立柱建物の存続時期が出土遺物から13世紀後半～末頃の約半世紀以内の間でおさえられることから、この間で一度建て替えが行われたと考えられること、③さらに、建物の配置・規模・主軸方向等からみて、掘立柱建物1が主屋であり、西側に位置する掘立柱建物2がその付随建物となると考えられ、88年-1・6区の調査で検出された同時期の屋敷跡と同方位・同規模・同配置の建物配置を探すこと、④屋敷地内に、導水を主目的とすると考えられる溝（溝2）と、その溝が接続する方形土壙（土壙3）、さらに土壙隅からはじまる排水を目的とすると考えられる溝（溝3）というように、水を必要とする作業に関わると想定される一連の遺構が検出されたこと、⑤その土壙3が掘立柱建物2内に位置することから、この建物内において水を必要とした作業を行っていた可能性がみいだせること、⑥掘立柱建物1の根石に東円寺の瓦が転用されていたことから、少なくともこの掘立柱建物1の建築が行われる13世紀半ば以前に一度は東円寺の寺院衰退があった可能性が想定されること、⑦東円寺の蓮華文軒丸瓦に関しては、初めて瓦当部が完全な形で残る軒丸瓦が出土したことと、加えて今回の軒丸瓦に用いられていた範と、それをさらに粗略化した範（87-1区出土瓦）の2範が少なくとも存在すること、等が挙げられよう。

以上のように、成果を要約したが断定しえない点も多々ある。⑧の屋敷地の問題に関しては周辺の調査の進展により確実性が増すであろう。残念ながら⑨・⑩についてはどうしても推定の域を越えない訳であり、類例の発見を今後に期待したい。⑪・⑫は東円寺という寺院自体に関わることである。特に⑪は東円寺の盛衰に関わる問題であり、伽藍配置・存続時期等の問題も含めて、今後早急に解明すべき重要課題の一つとして挙げておきたい。

註

（1）熊取町教育委員会『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・II』（1988.3）



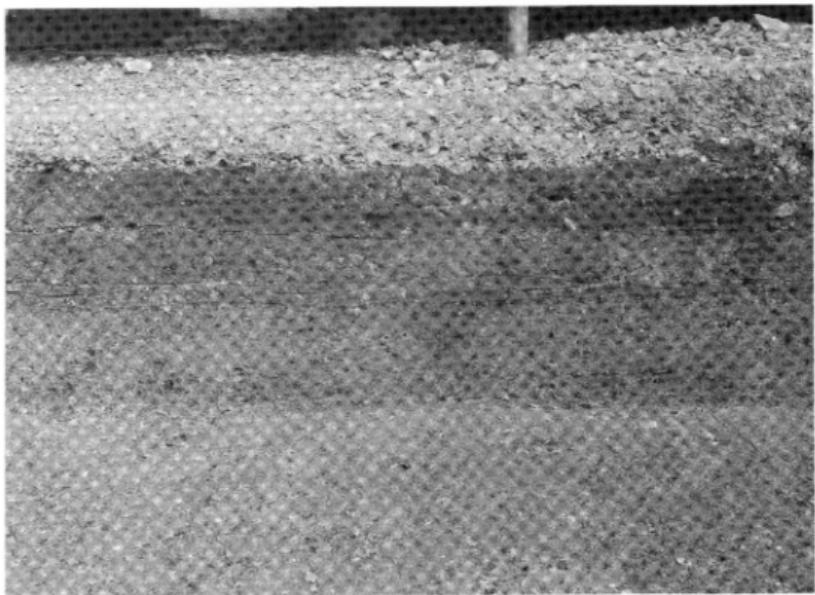
第10図 周辺施設配置図

表 1 遺物観察表

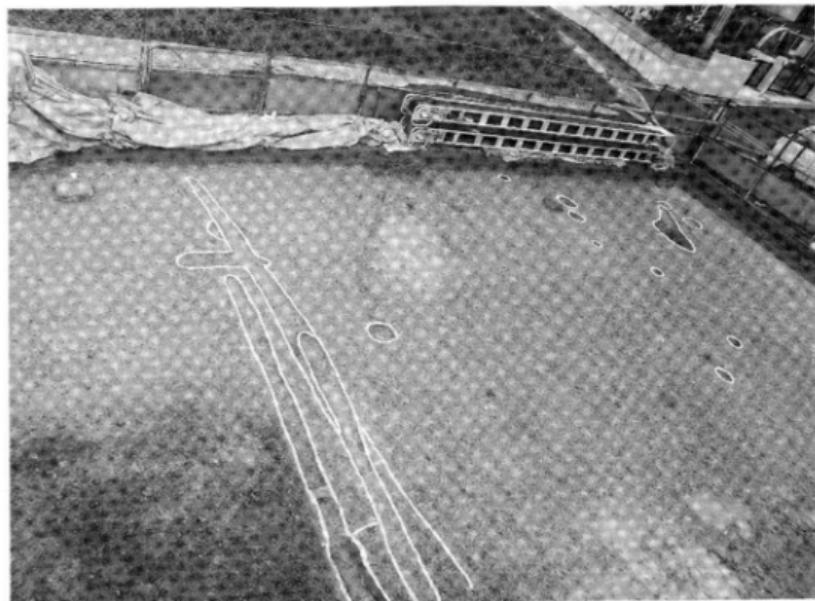
No.	器種	口径cm	器高cm	底径cm	地成	胎上	色	法	出土地	備考
1	瓦 軒丸		14.7		良好	やや粗。径1~2mmの石英等を多量に含む。	(内外面) N3/(暗灰色)		Pit 1	複葉蓮花文。2次焼成受ける。
2	" "		14.5		"	"	(内外面) "		Pit 4 Pit 6	" 瓦当部 P It 4、丸瓦部 Pit 6
3	須恵器 壺		9.2		堅固	密。径1mm前後の石英等を含む。	(内外面) SBS/1(青灰色)	内面回転ヨコナデ。外面回転 ヘラケズリ。	土壇 1	反板復元。
4	土師器 小壺	7.6	1	6.6	良好	やや密。径1mm以下のクサリレキ等を多量に含む。	(内外面) SYRS/4(にぶい黄褐色)	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。溝 2	"	
5	" "	8.8	1.4	7	"	やや密。径1mm以下の石英やクサリレキ等を多量に含む。	(外面) 10YR7/2(にぶい黄褐色) (内面) 10YR6/2(灰褐色)	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。溝 3	"	
6	瓦 轍	8.2	1.6	6.4	"	やや粗。	(内外面) N5/(灰色)	"	"	"
7	" "	8.8	1	7.8	"	密。径1mm以下の石英等を多量に含む。	(内外面) N5/(灰色)	"	"	"
8	" "	8.8	1.5	7	"	やや密。	(内外面) N4/(灰色)	"	"	"
9	" "	10	1.7	5.8	"	やや密。径1~2mmの石英等を多量に含む。	(内外面) 2,SYR7/1(灰白色)	"	"	"
10	" "	9.2	1.3	7.8	"	密。径1mm以下の石英等を多量に含む。	(内外面) N4/(灰色)	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。 底部に指頭痕あり。	土壇 1	"
11	" "	8	1.1	6.4	"	やや密。径1mm以下の石英等を多く含む。	(内外面) N3/(暗灰色)	"	土壇 4	"
12	土師器	"	7.2		"	やや粗。径1mm以下の石英等を多く含む。	(外前) 10YR7/3(にぶい黄褐色) (内面) 10YR6/4(にぶい黄褐色)	摩滅のため調査不明。	土壇 5	"
13	瓦器 輪	14.2			"	密。クサリレキ等を少量含む。	(外前) 7,SY7/1(灰白色) (内面) 2,SYR8/2(灰白色)	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。溝 2	"	
14	" "	14.2			"	密。径1mm以下の石英等を多量に含む。	(外前) N3/(暗灰色) (内面) 7,SY7/1(灰白色)	"	"	"
15	" "	16.6			"	やや密。径1mm以下の石英等を多量に含む。	(外前) 7,SY5/1(灰色)	"	"	"
16	" "	15			"	密。径1mm以下の石英等を多量に含む。	(内外面) N3/(暗灰色)	"	溝 3	"
17	" "	15	4	4	"	密。径1mm以下の石英等を多く含む。	(内外面) 2,SYR8/1(灰白色)	"	土壇 1	點付高台
18	" "	17			"	やや粗。径1mm前後の石英等を多量に含む。	(外前) 2,SY7/1(灰白色) (内面) 10YR5/1(灰白色)	"	土壇 2	"
19	" "	15.8			"	密。	(内外面) N4/(灰色)	"	"	"
20	" "		4.8		"	やや粗。径1~2mmの石英等を多量に含む。	(内外面) 2,SYR8/2(灰白色)	内面ナデ。体部外面に指頭痕 あり。	"	點付高台
21	" "	14			"	やや密。径1~2mmの石英等を多く含む。	(内外面) 7,SY5/1(灰色)	口縁部ヨコナデ。内面ナデ。 体部外面に指頭痕あり。	土壇 3	"
22	" "	14.2			"	"	(内外面) N3/(暗灰色)	"	土壇 4	"
23	" "	12.4			"	やや密。径1mm以下の石英等を多量に含む。	(内外面) 10YR7/1(灰白色)	"	包含層	"
24	" "		4		"	"	(内外面) N4/(灰色)	内面ナデ。体部外面に指頭痕 あり。	溝 2	點付高台
25	" "		4		"	やや密。	(内外面) 7,SY7/1(灰白色)	"	"	"
26	" "		4.5		"	やや密。径1mm以下の石英等を多く含む。	(外前) 2,SYG8/1(灰白色) (内面) 2,SYR8/1(灰白色)	内面ナデ。	"	"
27	" "		4.2		"	やや密。	(外前) SY8/3(淡黄色) (内面) SY5/2(灰オリーブ色)	"	土壇 4	"
28	" "		4.5		"	密。径1mm以下の石英等を多く含む。	(内外面) SY7/1(灰白色)	摩滅のため調査不明。	土壇 5	"
29	土師器	"	5		"	"	(外前) 10YR8/2(灰白色) (内面) 10YR8/3(淡黄色)	"	土壇 4	"
30	土師器 羽垂				"	やや粗。径1mm前後の石英等を多量に含む。	(内外面) SYRS/4(にぶい青褐色)	ナデ。	溝 2	脚部分
31	瓦器 脚付羽垂				"	密。	(内外面) SYRS/4(にぶい赤褐色)	面トリの後にナデ。	Pit 7	脚部分

図 版

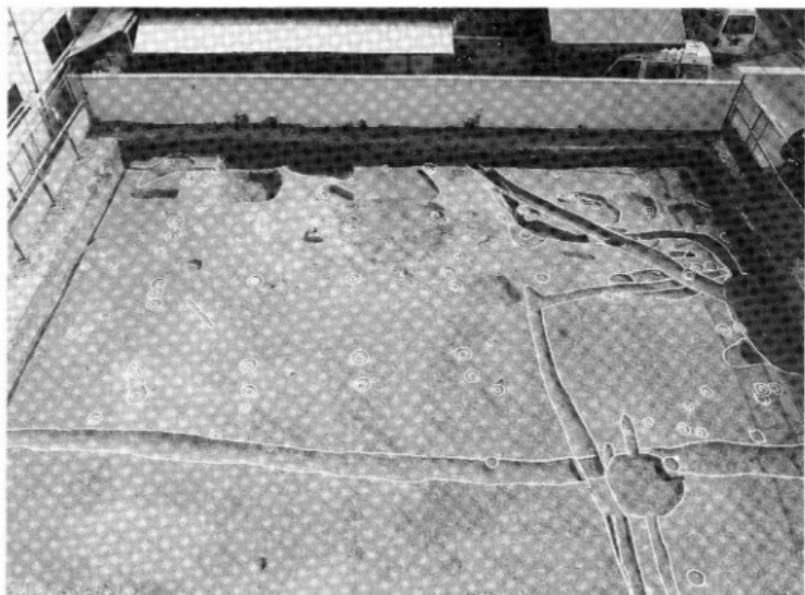
図版第一 遺構



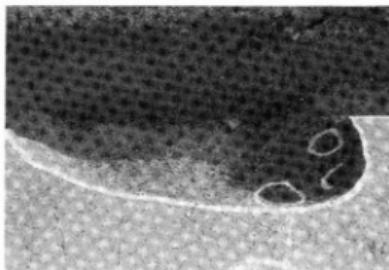
東壁断面



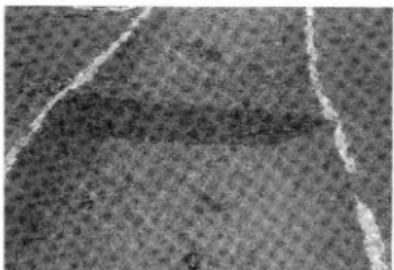
第2遺構面 北半部（西より）



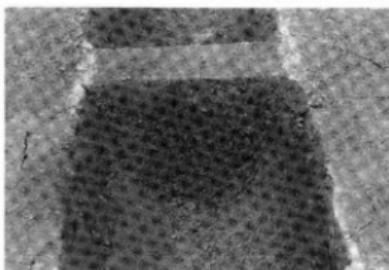
第2遺構面 南半部（北より）



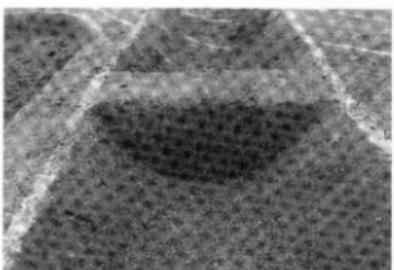
第1遺構面 土壌1



第2遺構面 溝1断面

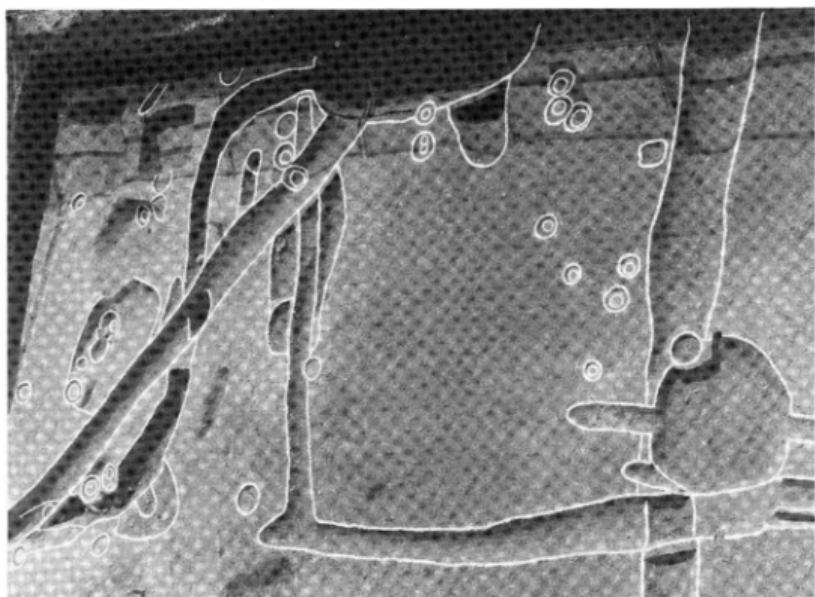


溝2断面



溝4断面

図版第三 遺構

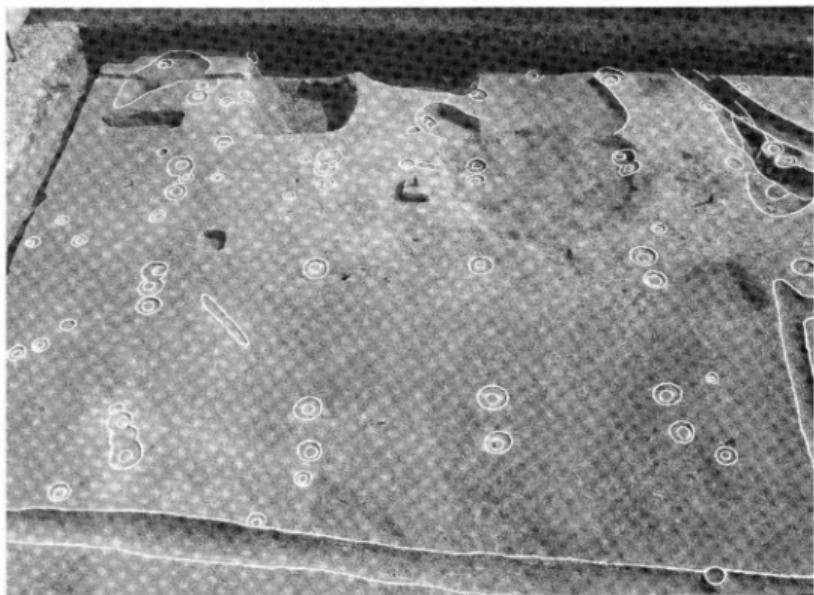


第2遺構面 南西部（北より）



同（南西より）

図版第四
遺構

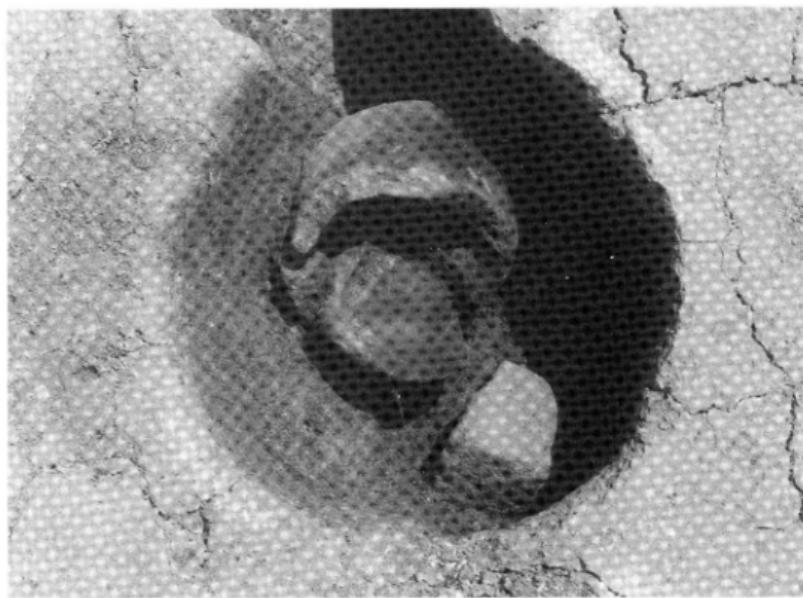


掘立柱建物 1 (北より)

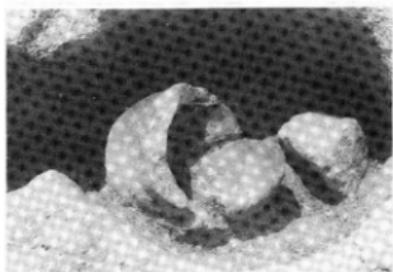


掘立柱建物 1 柱穴断面

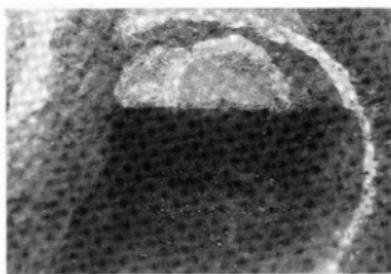
図版第五
遺構



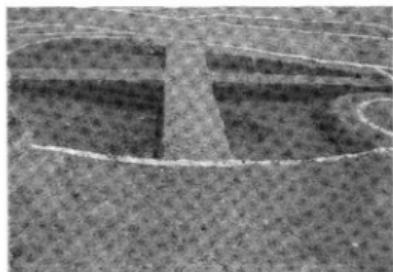
柱穴 1 軒丸瓦出土状況（北より）



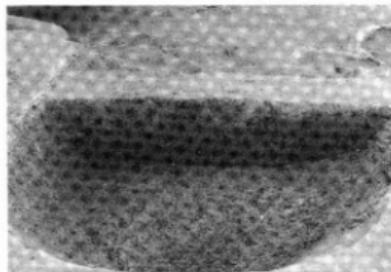
柱穴 1 軒丸瓦出土状況（東より）



柱穴 6 軒丸瓦出土状況（西より）

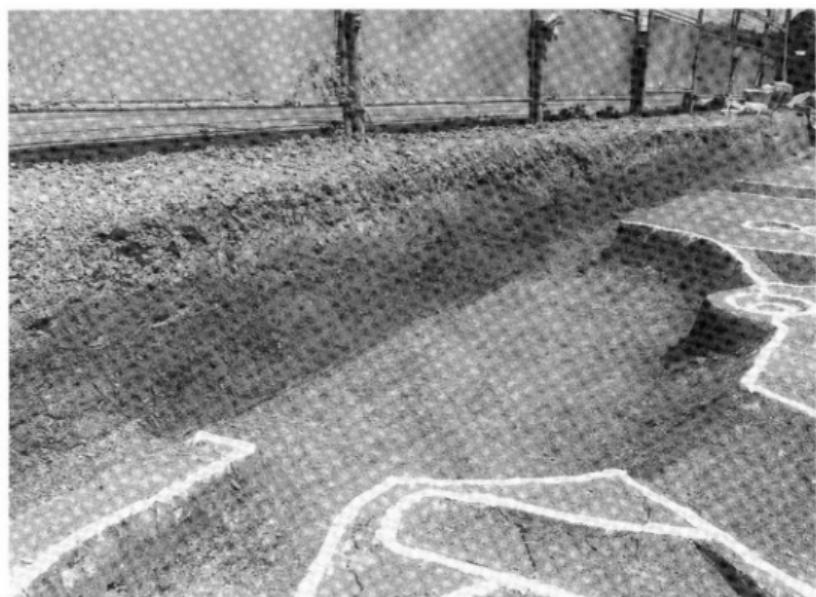


土 壤 4（西より）

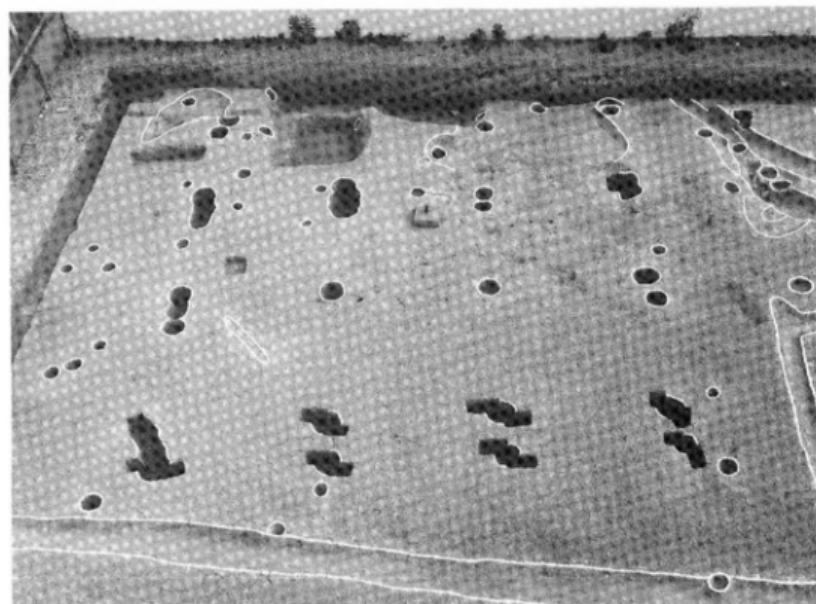


土 壤 7（東より）

図版第六 遺構

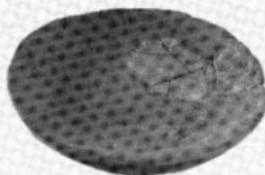
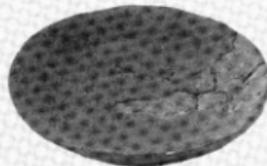
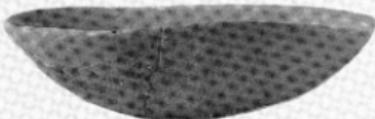
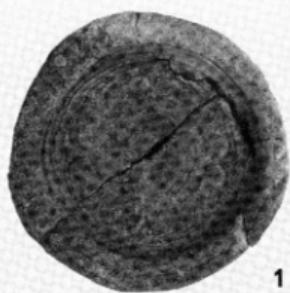


土壙 3 (南より)



掘立柱建物 1 完掘状況 (北より)

図版第七 出土遺物



熊取町埋蔵文化財報告第19集

東円寺跡発掘調査概要・VII

— 東円寺跡92—1区の調査 —

発行日 平成5年3月31日

編集・発行 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町大字野田

2244番地

印 刷 摂河泉州文庫